

ソースタイン・ヴェブレン

小原敬士

一 不死鳥のように

コロムビア大学のジョセフ・ドーフマン Joseph Dorfman 教授は、一九五七年十二月、フィラデルフィアにひらかれたアメリカ経済学会一九五七年年次大会の席上、ソースタイン・ヴェブレンの生誕百年祭に関連してつぎのようにいった。

「アメリカ経済学会がヴェブレン生誕の百年祭を祝わねばならないということは、それ自身が経済思想の成長にたいするかれの影響力を承認したものと考えてもよいかもしれない。かれの著作が依然として多くの論争の源泉となつてゐることは、その生命力を証明するものである。」

ソースタイン・ヴェブレン (Thorstein B. Veblen, 1857

—1929) は、アメリカが生んだ特異な経済思想家であった。かれは、その人柄が狷介であり、奇矯であったと同時に、かれの学才は、きわめて広汎、深遠であり、また独創的、批判的であった。かれの思想と業績は、まさにドーフマン教授がいうように、アメリカの経済思想の発展に大きな影響をあたえたばかりでなく、そのあるものは、不死鳥のような生命力をもって生き永らえ、いまなおわれわれに啓示的な光をあたえている。

ヴェブレンは、一九〇四年に出版された『営利企業の理論』(The Theory of Business Enterprise, 1904) のなかで、アメリカにおける景気変動の様相と性格についてつぎのような明快な説明をあたえているが、それはいまでも十分に通用する理論である。

「七〇年代以来……経済情勢の経路は……恐慌や不

況にかんして明らかにひとつの永久的な変化をとげた。……これらの最近の期間においては、長期的不況が経済界の例外ではなくて、むしろ通例となっており、しかもそれがますます持続的となつてゐる。この期間での好況期、「通常の繁栄期」は、かなり一律に、固有の産業過程にたいして外部的な特殊の原因にもとづくものと考えられる。あるばあい、つまり九〇年代初期においては、それは特別の豊作事情であつたようにおもわれる。またもっとも際立つた投機的インフレーションのばあい、つまり、いま（一九〇四年）明らかに終りにちかづかうとしてゐるようなばあいにおいては、……不況を停止させ、経済界に繁栄をもたらしたものは……西米戦争であつた。現在の繁栄がそれによつておしすすめられた外部の刺激が適当な歩調でつづかなければ、繁栄期はひきのばされるであらう。そうでなければ、多かれ少なかれ突発的で広汎な清算以外の結果は期待できさうもない。……つまり、産業的支出以外の支出、すなわち、産業の立場からみれば、純然たる浪費であるような支出による財貨や労務の吸収がますます多量におこなわれねばならないであらう。も

しも浪費的な支出が弛緩するならば、その論理的帰結は、企業や産業の大きな攪乱となり、不況がそれにつづくことにならざるをえないであらう。⁽³⁾

かれは、一九一九年に著わした『平和の性質』(F. Veblen, *An Inquiry into the Nature of Peace and the Terms of Its Perpetuation*, 1919) のなかでは、第一次世界大戦後の国際情勢の展望に関連して、ドイツと日本とが、両者に共通な政治経済構造の特殊な性格のために、おそらく将来、世界平和にたいする攪乱の要素としてこのころであらうということをおそるべき洞察をもつて指摘してゐるが、それもまた、不朽の功績といふべきものであらう。

「これらの二つの国民団体は、きわめてよく似てゐる。……この二つの国は、国内的な無秩序や不満の可能な正策としてのほかは、戦争を『欲する』ことはない。しかし、両国とも領土を渴望してゐる。そして、狙つてゐる領土は、そのために戦うことなしにはえられないものであるから、両国は結局、どうしても軍事的な事業に熱中せざるをえない。……両国の野望のなかの帝国主義的領土は、帝国主義国家の性質のな

かにあるのであるから、それは代価を超越している。したがって、その帝国主義的事業に最後の成功がともなうかぎり、いかなる代価も高すぎることはない。：明らかに、これらの二つの帝国主義列強が存在するかぎり、いかなる平和条約も頼みにならぬ状態となるであろう。」

日本のことについては、ヴェブレンは、すでに一九一五年に、いっそう具体的にその将来の運命を予測している。

「それゆえに、つぎのこともまた、その前提条件のなかにふくまれている。それは、問題を(帝国主義的に)首尾よく解決するためには、この君主国の政府は、その用いうるあらゆる力を残りなく、ひとつのやみくもな突進のなかに投げ入れねばならない、ということである。けだし、ことの性質上、この種の好機は二度と望むことができないからである。」

ヴェブレンは、哲学、民俗学、歴史学、社会学、経済学などの広く、ふかい学識を基礎として、近代文明、アメリカ資本主義、経済学方法論、教育、労働問題、国家論などの諸問題について、透徹した分析と、するどい批

判をおこなった。かれが死んでからもう三十年あまりになるが、かれの残した学問的業績のなかには、まだまだなお掘りおこす値打がある多くの財宝がかくされている。

(1) Joseph Dorfman, "Source and Impact of Veblen," *The American Economic Review*, Vol. XLVIII, No. 2, May 1958, p. 1.

(2) 経済学にかんするかぎり、ヴェブレンが、ジョン・アール・コモンズ、ウエルシー・ミッチェル、サイモン・クズネツツ、ジョン・ケネス・ギヤルブレイスなどのいわゆる制度学派の流れをくむひとびとのうえに大きな影響をあたえていることは疑いがなすが、ここでは、その影響の評価については、これ以上立ち入ることができない。

(3) T. Veblen, *The Theory of Business Enterprise*, 1904, p. 250f.

(4) T. Veblen, *An Inquiry into the Nature of Peace and the Terms of Its Perpetuation*, 1919, p. 82—83.

(5) T. Veblen, "The Opportunity of Japan," *The Journal of Race Development*, Vol. VI, July 1915. T. Veblen, *Essays in Our Changing Order*, 1954, p. 266.

二 時代と環境

ヴェブレンは、一八五七年七月三十日、ウイスコンシ

ン州カトウ・タウンシップのある農場に、ノールウェー
からの移民トーマス・アンダースン・ヴェブレン(Thomas
Anderson Veblen と、その妻カリ・ブレンデ Kari Brunde
の十二人の子供の第六子として生まれ、その八歳のと
き、一家とともにミネソタ州ナースランドに移り、その
地のノールウェー移民の開拓地で成育した。そこでは、ひ
とびとはすべてノールウェー語で話し、英語はむしろ
「外国語」であった。そのなかに育ったヴェブレンは、
いつまでたっても「田舎者」の空気から脱することがで
きなかつた。後年かれがイェール大学の大学院にすすん
だときも、級友たちは、かれを、「外国人」とか「北西部
のスカンディナヴィア人」などとよんだ。ヴェブレンの
性格や思想は、その生涯を通じて、孤独癖や非社交性に
よってつよく特色づけられていたが、それは、このよう
な成育期の特殊の生活環境の影響によることが多いとみ
られている。

ヴェブレンが成長した時代は、アメリカの近代資本主
義が、南北戦争を境として、嵐のように急激な発展を示
した時代であった。主として東部の港湾や工業都市で
は、紡績、織布、製粉、造船、鉄道、銀行、保険などの

近代産業が非常な勢いで成長していた。そして、企業は
株式会社の形態をとるようになり、資本の集積と集中と
が進行し、「トラスト」をめぐる論議がさかんとした。
農村では、定住者に優先的に土地をあたえることを目的
とした「家産法」(一八六二年)が制定されていたけれど
も、しかし、実際には、東部の大地主、商人、不動産業
者、金融業者などによる土地の投機と買占めがさかんに
おこなわれ、移民や貧農は容易に土地を手に入れること
ができなかつた。そこには、ヴェブレンが後に『不在所有
者制』(一九二三年)のなかで詳論したような状態が現実
にあらわれていた。

ヴェブレンは、十七歳のとき、将来は牧師にしたいと
いう父親の希望によって、同じくミネソタ州のノースフ
ールドにあったカールトン・カレッジに入れられた。
それは、神学的雰囲気があった学校であって、かれは
そこで、言語学、博物学、哲学、経済学などを授けられ
た。そのときの経済学の教師は、限界理論の創始者のひ
とりであるかのジョン・ベイツ・クラーク John Bates
Clark (1847—1938)⁽¹⁾であった。一八八〇年、カールトン
を卒業したヴェブレンは、しばらくウイスクンシン州マ

ディスンのルーテル派の学校で数学を教えた後、翌年の秋、ボルティモアのジョンズ・ホプキンス大学の大学院にはいり、さらにイエール大学に移った。かれがジョンズ・ホプキンスにいたのは、一学期足らずの短い期間であったが、その間にかれが、哲学者チャールズ・バース Charles S. Peirce (1839—1914)⁽²⁾と経済学者リチャード・イーリ Richard T. Ely (1854—1943)⁽³⁾を知ったことは、記録に値いする出来事であった。

イエールでは、ヴェブレンは、とくに学長ノア・ポーター Noah Porter (1811—92) および社会学者ウイリアム・サムナー William Graham Sumner (1810—1910)⁽⁴⁾によって学問的感化をあたえられたようにみえた。かれは、とくにポーターの懇切な指導のもとに哲学の研究に専念し、一八八四年、『因果応報説の倫理学的基礎』という論文によって哲学博士をあたえられた。サムナー教授からは、スペンサー流の社会的ダーウィニズムの思想を教えられた。

しかし、学位はとったものの、定職は容易にみつからなかった。クラーク、ポーター、サムナーなどの有力な推薦にもかかわらず、ヴェブレンの非社交性、田舎者ら

しい風采、思想上の非国教的立場などが、かれがアカデミーの世界にはいることのさまたげとなった。そしてかれは、ミネソタの故郷に帰ってもっぱら読書と思索に明け暮れる生活を送ることを余儀なくされた。一八八八年には、かれはエレン・ロルフ Ellen Rolfe という婦人と結婚した。かの女は、中西部の上流家庭の娘で、その父親は豊かな実業家であり、伯父はカールトン・カレッジの学長、もうひとりの伯父は鉄道業者であった。ヴェブレンは、カールトン時代にエレンと相識り、周囲の反対をおかして一八八六年婚約をむすび、二年後に正式に結婚したのである。かれは結婚と同時に、エレンの父親の農場があったアイオワ州のステイシーヴィルにうつり、依然として読書の生活をつづけた。ヴェブレンは、そこで植物学の研究をおこない、また妻といっしょにエドワード・ベラミー Edward Bellamy の『回顧』(Looking Backward, 1888)をよんだとつたえられる。

そのような生活は、一八九一年までつづいたけれども、それは、ヴェブレンにとっては、けっして空しい日月ではなかった。というのは、かれは、その間、食るような読書と、いろいろな社会的出来事の鋭い観察とによ

って、その思想内容を豊かにする蜜をせっせと貯えていたからである。

まったく一八八〇年代のアメリカは、いわばひとつの「疾風怒濤」の時期であった。一八七三—七九年の恐慌がおさまったとおもう間もなく、一八八四年には、また新しい恐慌がはじまり、なかでも農産物ははげしい値下りとなった。しかし、他方では、石油事業、鉄道業などの近代産業が隆々たる勢いで発展し、一八八二年には、スタンダード石油トラストが結成された。資本家層と、農民、労働者との階級的対立がはげしくなった。一八八六年には、シカゴで血なまぐさいヘイマーケット事件がおこった。その翌年には、労働騎士団と農民同盟との両方の全国大会がミネアポリスにひらかれた。ヘンリー・ロイド、アイダ・ターベル、リンカン・ステフェンスなどのいわゆる「独占暴論者」^{Monopoly Theorists}たちは、筆をそろえて、独占資本家の不正と横暴を攻撃した。そして一八八七年には、鉄道独占をとりしめるための「州際商業法」が成立し、一八九〇年には「シャーマン法」が制定された。

このようなアメリカ社会の激動は、いくらアイオワの

田舎にとじこもっていても、鋭敏な頭脳の持主であるヴェブレンに影響をあたえないわけにはゆかなかった。かれは、そのころから、その学問的関心を哲学から経済学ないしは社会学の方に急速に切り替えたようにみえた。かれが七年間の隠棲の後に、ラフリン教授に会うためにイサカへ出てきたときには、かれはもう立派な経済学者であり、かれが学界にかえってから最初に発表した論文「社会主義理論の若干の閑却された点」⁽⁶⁹⁾ ("Some Neglected Points in the Theory of Socialism," 1892) は、かなり明快な社会主義弁護論の上に立って、スペンサーの社会主義論を批判したものであった。

(1) ヴェブレンは、その後一九〇八年、「クラーク教授の経済学」と題する長文の研究論文をかき、そのなかで同教授についてつぎのようにかいている。「近代理論に興味をいだくもので、かれ〔クラーク〕のおかけをうけていないものは、ひとりもない。それと同時にかれは、とくに際立って、かれの分野の研究者の注意ばかりでなく、愛情をもひきつける才能をもっている。」(T. Veblen, *The Place of Science in Modern Civilization and Other Essays*, 1919, p. 180.)

(2) チャールズ・バースはそのころすでに「科学の論理」その他の一連の論文を発表して「思想の全機能は、行動の

習慣をつくり出すことであり、「思想は、つきつきに、それ以上の思想を生み出すひとつの行動である。」と主張していた。ヴェブレンは、後に、人間性にかんする独自の考え方をもとにして、従来の経済学の「受動的心理学」をきびしく批判したが、それは、ひとつにはパースのそのような行動主義哲学の影響によるものとおもわれる。

(3) イーリは当時、ハイデルベルクへの留学から帰ったばかりのドイツ歴史学派の系統に属する経済学者であったが、ヴェブレンはその学問について「かれ自身のものはちっともなかった」といっている。

(4) サムナー(一八四〇—一九一〇年)は、もともと長老派教会の牧師であったが、一八七二年以後、イェール大学において、経済学や社会学を講じたかれは、*What Social Classes Owe to Each Other*, 1883. *Collected Essays in Political and Social Science*, 1885. などの著作のなかで、ジョン・ケヤンズ John E. Cairnes の方法論とハーバート・スペンサー Herbert Spencer の社会学説を基礎として、きわめて明白なレッセ・フェイア哲学を説いた。

(5) この論文は最初 *Annals of American Academy of Political and Social Science*, Vol. II, 1892. に発表されたが、その後、*The Place of Science*, 1919. に収録された。

三 はなばなしきデヴェー

ヴェブレンは一八九一年の冬、イサカのコーネル大学にローレンス・ラフリン J. Laurence Laughlin 教授を訪ね、その斡旋によって同大学のリーダーに採用された。ラフリン教授は、さらにその翌年、新設のシカゴ大学の経済学部長に就任するとともに、ヴェブレンをティーング・フェロウとしてシカゴにともなった。このようにして、蟬の幼虫のように永年地中に埋もれていたヴェブレンは、ラフリンのおかげでやっと青空を仰いだ。

シカゴ大学は、ジョン・デイー・ロックフェラーの資金によって建てられ、三十六歳の有能な人物ウィリアム・ハーバー William R. Harper を総長にいただいた新興の気分にみちた大学であった。そこには、経済学者ラフリン、同じくチェンバーレン、社会学者スモール、生物学者ジャック・レーブ、哲学者ジョン・デューイ、心理学者ウイリアム・コールドウェル、その他、いままでの伝統的な学問をあきたらなくおもっていた新進気鋭の学者や進歩的な思想家がたくさん集っていた。

そのうえ、中西部の新興工業都市シカゴは、そのころのアメリカのあらゆる経済問題や社会問題の坩堝ともい

うべき町であった。かのヘイマーケット事件がおこったのもこの町においてであったし、一八九四年には、エージン・デブスの指導によるブルマン会社の争議や、コクシーの煽動による失業者のデモが、やはりこの町を中心としておこなわれた。ヴェブレンは、このような環境のなかで、ますます経済学や社会主義の研究をおしすすめ、そのなかから、独自の思想体系をつくり上げた。かれは、そのころ自分が編集責任者であった「政治経済学雑誌」(Journal of Political Economy)に、毎号のように論文や書評を執筆したが、それは経済学の方法や社会主義にかんするものが多かった。まったく、マックス・ラーナー Max Lerner もいうように、⁽²⁾かれの思想内容はすべてこの間に築き上げられたといってもいいすぎでない。

そしてかれは、このような準備作業ののちに、一八九五年の秋頃から『有閑階級の理論』の執筆にかかり、四年後の一八九九年二月に、処女作『有閑階級の理論』(T. Veblen, *The Theory of Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions*, 1899)を世におくり、それによって一躍、学界の脚光を浴びたのである。

この書物は、生産的職業にたずさわる勤労階級の対立物である非生産的有閑階級の発生、成長の過程と、その思考習慣ないしは生活様式の特徴を、文化人類学、社会史、文化史、経済学などの該博な知識を基礎として究明しようとしたものであった。かれの考え方によると、人間社会の最初の発展段階である未開時代(savagous age)においては、ひとびとの生活はなお「製作本能」(instinct of workmanship)によってみちびかれており、富の所有にもとづく社会階級間のいまいましい区別(invidious discrimination)などではなかった。ひとびとのあいだの区別は、生産的能力(serviceability)の大小にもとづく区別だけであり、かれらのあいだには、もっぱら、生産上の対抗競争(industrial emulation)がおこなわれた。しかし、社会的進化がすすむとともに、しだいに生産的階級と非生産的階級との区別があらわれてくる。そのような階級の分化は、まず最初、農耕や織布にたずさわる女性と、主として戦争や掠奪にしたがう男性とのあいだの分業からはじまったが、その後、ポリネシヤやアイストラッドにみられるような初期野蛮時代においてますます明瞭となり、さらに中世ヨーロッパや封建的日本のような

高度野蛮時代において、いっそう高度の発展をとげた。そこでは、集団の生活維持のために必要な肉体的労働にたずさわる女性、奴隸、婢女などからなりたつ下層階級と、卑賤な生産的労働から「免除」されて、もっぱら政治、軍事、宗教儀式、学問、スポーツなどをこととする上層階級とが発生する。

ことに私有財産制度が一般的となるとともに、ひとびとの生活は、財貨の所有のための「万人の戦い」の生活、もしくは金銭的見栄のための生活となる。このような段階では、社会的名声を博し、高き社会的地位に立つための手段は、もはや肉体的な力や狡智ではなく、たんに富の所有ということとなる。正常以上の財産をもつものが上層階級におし上げられる。したがって、そのためには、ひととはたんに富をもつだけではなく、その所有の事実を証明してみせることが必要となる。そこで、いっさいの賤しい生産労働からの解放——閑暇——とか、ひと目に立つような消費もしくは浪費——いわゆる「衛示的消費」(conspicuous consumption)——とか、もしくは、美術、建築、庭園、衣裳、愛玩動物などにかんする「高き趣味」の享楽といったようなことが、上層階級の

ひとびとの生活の表徴となる。かくしてかれらは「有閑階級」(Leisure class)となる。

このように、有閑階級は、いわゆる金銭的競争の勝利者であり、あらゆる生産的労働から隔離されて、富の蓄積のうえに、衛示的消費と閑暇を享受する階級であって、その点から必然的に、かれらの保守的性格がみちびき出される。「有閑階級制度は、階級的利害と本能によって、制度の現在の悪調整の永続化をはかり、さらにいっそう古い生活様式への復帰にさえ賛成する。」「有閑階級は、本質的につねに、社会進歩とか、社会発展とかよばれるような環境への適応を制止するように行動する。この階級の特徴的な態度は、「存在するものはすべてよいものである」という格言に要約される。」

有閑階級はまた必然的に寄生的であり、したがって、それは、社会発展のある段階においては、当然に、余計なものとなる。ヴェブレンの見解によると、有閑階級の経済過程にたいする関係は、生産の関係ではなくて、獲得の関係であり、奉仕性の関係ではなくて、搾取の関係である。かれらの職能は、寄生的性質のものであり、かれらの関心は、あらゆるものを自分たちの用途にむけ、

あらゆるものを自分の支配下におくことである。実業界の慣行は、このような掠奪と寄生の原理の淘汰的な監視のもとに発達したものである。それは、所有の慣行であり、古代の掠奪文化からの派生物である。しかし、このような過去の状況の所産である金銭的制度は、現在の状況にはまって適合しない。産業生活の変化は、獲得方法の変化を要求する。そこで、金銭的階級は、私的利益の取得のために、最大の効果をもたらすように金銭的制度を適応させることに関心をもつ。かくして、有閑階級は、その金銭的な利害と思考慣習によって制度的発達にたいして指導的な影響をあたえるのであり、その結果として、財産の保障、契約の履行、金銭取引の便宜、既得権などを助長する立法や慣習が生み出される。このような金銭的制度の構造とその改善の直接の目的は、平和的で秩序ある搾取を、よりいっそう容易にすることである。しかし、それは、さらにいっそう大きな間接的効果をもつ。このような営利活動の円滑化は、産業生活をいっそう順調ならしめるのに役立つばかりでなく、その結果として日常の機敏な判別力を必要とするような混乱や錯綜が排除されることは、金銭的階級そのものを、余計

なものたらしめる作用をもつ。近代的制度のひとつの改善は、産業の将帥の代りに「魂のない」株式会社を代置せしめたが、それは、所有という有閑階級の大きな機能を排除することに役立っている。ヴェブレンは、そのように論ずるのである。

ヴェブレンが、このような『有閑階級の理論』をかくに当たっていただいていた真の意図は、主としてアメリカ社会を頭におきながら、資本主義社会の成立過程、その構造と性格といったようなものを全面的に究明することであり、本書はその第一歩であった。しかし、そこには、すでに、かれがその後、その生涯をかけて発展させたあらゆる理論なり思想なりが、原型ないしは萌芽の形で、すべてふくまれていた。そこには「製作本能」と金銭的見栄との二元論を中心とする独特な社会心理学があった。未開、野蛮、文明の歴史段階にかんする歴史哲学があった。「街示的消費」の社会学もあったし、「企業」と「産業」の二重構造の経済学もあった。またヴェブレン独特の学問、教育論も論じられていた。ただ、経済学批判の問題が、まだ十分には示されていないが、しかし、「経済人」の概念にかんする論議のなかには、古典

派経済学の方法にたいする批判の芽がすでにはっきりと芽生えていた。実際、ジョン・チェンバーレン⁽³⁾もいつているように、この書物と、そのつぎの『営利企業の理論』(一九〇四年)のなかに、ヴェブレンのすべてがあるといっても、いすぎではない。

『有閑階級の理論』の出現は、アメリカの学界に大きな衝撃をあたえた。なかには、「自分たちの屋敷のなかの神々が、この偶像破壊者によって攻撃された」(レスター・ウオード)というかどで、悪意と反感を示したのもあった。しかし、ヴェブレンの該博な学識、警拔な着想、鋭い批判、そして独創的で魅力ある表現にたいして感嘆し、拍車をおくったものも少なくなかった。かくしてヴェブレンは、いわば一夜のうちに一流学者に仲間入りした。

(1) 当時のシカゴ大学と、ヴェブレンとの関係については拙稿「ソースタイン・ヴェブレンとシカゴ大学」(一橋論叢、第二十三巻第四号、昭和二十五年四月)を参照されたい。

(2) マックス・ラーナーはいう。「この十年間にかれが学術雑誌にかいた論文は、かれのおもな思想の大部分をふくんでいる。それは、虚栄、製作本能、産業的職業と金銭的

職業、私有財産制の起源、婦人の衣裳の経済学、形式主義の批判、伝統的経済学の『予備概念』の暴露、進化的経済学の提唱などである。」(Max Lerner, ed., *The Portable Veblen*, 1950, p. 5)

(3) ジョン・チェンバーレン John Chamberlain は、「実際、ヴェブレンのあらゆるものは、かれの最初の二冊の書物のなかにある。かれはその後、『技術者と価格体制』、『特権階級と庶民』その他、関連した題目についてかくこととなった。……しかし、ヴェブレンの肉は、一九〇四年にはすでにテーブルにのってゐた」という。(The *Marxian Quarterly*, July 1933, p. 333)

四 『営利企業の理論』

『有閑階級の理論』は、問題がきわめてひろい範囲にわたり、むしろ社会学もしくは文化人類学の部類にはいる著作であったが、ヴェブレンは、この出版にひきつづいて、資本主義経済の構造や運動そのものを真正面からとり扱った経済学的著作の執筆にとりかかった。それは、最初は、『産業の将帥』(The Captain of Industry: A Romance)とこう表題となるはずであった。そのころ、アメリカの学界では、独占、マナー・トラスト、恐慌などにかんする論議がさかんであった。ヴェブレン

は、それらの諸問題にかんする多くの書評や論文をかきながら、本書の執筆をすすめ、一九〇四年になって、第二冊目の、前著におとらず重要な著作を世に送った。それが『営利企業の理論』(T. Veblen, *The Theory of Business Enterprise*, 1904.) である。

この書物はヴェブレンの「近代資本主義論」であった。われわれは、この書物を中心とし、さらにその後にかかれた『特権階級と庶民』(一九二〇年)、『不在所有者制』(一九二三年) および二、三の論文——たとえば「信用と物価」(一九〇八年)、「資本の性質について」(一九〇八年)、「フィッシャーの資本と所得」(一九〇八年)など——をよむことによって、近代資本主義の本質や運動にかんするヴェブレンの見解を知ることができる。

「近代文明の物質的外枠は産業体制であり、そして、この外枠に生氣をあたえる指導力は営利企業である。近代キリスト教社会は、他のいかなる文化形態にもまして、その経済組織に似た顔つきをしている。この近代的経済組織がいわゆる「資本主義体制」ないしは「近代的産業体制」である。」

これは本書の冒頭の言葉であるが、そこには、近代資

本主義の本質にかんするヴェブレン独特の見方が要約的な形で示されている。それは、近代資本主義体制は、そのなかに生産的な「産業」(industry)と「営利的な企業」(business enterprise)との二元性をもっており、しかも後者が前者を指導し支配する関係に立っている、という見解である。この点で、かれの考え方は、産業資本による剰余価値創出過程を強調するマルクス、ないしは合理的経営資本主義を重要視するマックス・ウェーバーとは異って、むしろ営利主義と経済的合理主義との二元的立場に立つウェルネル・ゾンバルトの立場にちかい。

このような二元論は、すでに『有閑階級の理論』のなかで示唆せられ、一九〇〇年の論文『産業的職業と金銭的職業』において、いっそうはっきりと主張されたかれの基本観念であるが、本書では、それがますます洗練された形で提示せられ、さらにそれを基礎として、貸付信用、資本集中、景気循環、国家統制、資本主義の将来といったようなあらゆる経済学的論議が展開される。

ヴェブレンの意見によると、資本主義体制における「産業」と「企業」との分化ないしは背反は、機械制産業が確立され、産業過程や市場の近代的連鎖が発展し、

事業の機会がますます多様で大規模となったばあい、はじめであらわれるものと考えられる。手工業時代もしくは機械産業の初期においては、産業と企業との機能分化は、それほどはっきりしていなかった。そのころは、企業者が産業設備の所有者であり、かれは、機械過程にかんする直接の管理をつかさどるとともに、その企業にかんする金銭取引をも管理していた。ところが、機械制産業が発展し、市場の規模が拡大するとともに、たんなる産業的効率とははなれて、たえず企業の金銭的側面に注意することがますます必要となる。かくして、企業者の注意は、一定の産業過程の古い形態の管理や規制から、いっそう有利な事業への機敏な投資や、他の企業との結合を通じての企業機会の戦略的支配へとうつってゆく。そして、ヴェブレンは、このような機能をいとなむ新しい形の企業の指導者を、従来のいわゆる「産業の将帥」(captain of industry) から区別して「企業の将帥」(captain of business) とよび、さらにそれを拡大して「特権階級」(vested interests) ないしは「不在所有者」(absentee owners) という概念をつくるのである。

「企業の将帥」の活動の目的は結局、金銭的営利を収

めることであって、生産そのものによって社会的に奉仕することではない。

「かれ「企業者」にとしての生産の重点は、生産物の販売可能性、その貨幣価値との交換性であって、人類の必要にたいするその実用性ではない。生産物は、販売される以上、なんらかの目的にたいする多少の実用性をもつことが必要である。しかし、最高の実用性が、貨幣を基準とする企業者にたいする最大の利得をもたらすとはかぎらないし、またその生産物がつねに、いつわりの実用性以外のものを要するともかぎらない。」

企業者はつねに、企業利潤の極大化を目指してさまざまな活動をおこなうのであるが、資本主義社会においては、かれはしばしば、「貸付信用」(loan credit) の巧妙な利用によって企業利潤を高め、また企業合同や独占をおしすすめる。貸付信用による資本の増大は、自己資本の節約と、資本の回転率の増大をもたらし、それによって企業利潤を高める。しかし、貸付信用によってえられる資本は、「予想収益」や「のれん」の資本化のばあいに明らかであるように、実体をともなわない「擬制」であり、

それはややもすれば「過大資本化(Overcapitalisation)」を
みちびく。このような貸付信用の金銭的性格は、企業合
同のばあいにも、もっとも典型的にあらわれる。そのよう
なばあいには、資金調達、せり、売り、買収、賃貸、株式、
社債発行などの信用操作をとまなうのがふつうである
が、それは、多くのばあい、有能な金融仲介業者いわゆる
「金融の将帥」の戦略的活動によっておこなわれる。

しかし、そのような貸付信用の利用は、どうしても永
続的、累積的となる傾向をもっており、信用拡張と物価
騰貴とのあいだに悪循環の関係が発生する。そして、そ
のような過程において、インフレイトされた企業資本
と、一定の予想収益の資本化としての産業資産とのあい
だに乖離が生じ、「この乖離が明白となるときに、清算
(恐慌)の時期がはじまる。」かくしてヴェブレンは、「機
械制産業が完全に発展した体制のもとにおける企業にと
っては、多かれ少なかれ、はつきりした長期的不況が正
常であるといってもよいであろう。」⁽⁴⁾といひ、「景気変動」
は、文字通り「企業変動」であると考えるのである。

ヴェブレンは、このように、資本主義経済の構造と運
動について、かれ独特の分析を加えた後に、本書の最後

のところ、資本主義体制と、政治ないしは国家との関
係について論述している。そのばあいのかれの根本的立
場は、「立憲的政府は企業の政府である。」「代議政体は
主として企業利益の代表を意味する。その政府は、きわ
めて一貫したひとつの目的をもって実業家の利益のため
に働くのがつねである。」と考えることであつた。かれ
は、このような立場から、今日からみてもきわめて示唆
的なつぎのような言葉を述べている。

「国民大衆のなかには、大衆の物質的利害が、なに
か超自然的な仕方、同じ統治範囲のなかにすむ実業
家の金銭的利害と一致するという素朴で、疑いのない
確信がある。」

「民衆は、このような一般の幻想の幸福なからくり
によって、自分たちは、同じ『共和国』の住民である
実業家に帰属する利得にたいして、ある種の形而上学
的分前をもつという感じをいだくようにさせられる。

だから、その国境内に住所をもつ実業家の商業的利得
を増進させるような政策は、すべて残りのすべての人
民に利益をもたらすものと考えられる。」⁽⁵⁾

この書物の出版も、アメリカの学界でいろいろな論議

をまきおこした。社会主義者ウオーリング W. E. Walling などは、ヴェブレンの業績を高く評価して、「あらゆる都市のなかでもっともアメリカ的な都市の教授であって、ロックフェラーのつくった大学の禄をはむヴェブレンは、宣伝屋ではなくて、その素材を科学的にとりあつかっている。かれは、アメリカの社会主義運動にたいして、哲学的な脊柱をあたえている。」とかいた。しかし、一方では、それにたいして、露骨な反感や非難を示すものも少なくなかった。かつてヴェブレンの同僚であったワーゲランド Agnes Wergeland などは、「ひとびとは、かれ(ヴェブレン)が、露骨で不愉快な真理以外のことは、同情ももたなければ宣伝もしないことを不快に思うにちがいない。」といった。

そのころ、シカゴ大学ではヴェブレンの立場はけっこうでよくなかった。かれの俸給は、一九〇三年になってやっと年一、〇〇〇ドルとなったが、それ以上には上らなかつた。身分も助教授がとまりであつた。かれは、『營利企業の理論』を世に送つた年にヨーロッパ旅行を企てたが、その旅行に関連して、ある種の私行上の噂がつたわつた。それが、かれのシカゴ大学での立場を決定的に

した。そしてヴェブレンは、一九〇六年、前後十五年間在任したシカゴ大学を去つた。

(1) ヴェブレンの資本主義にかんする見解については、拙稿「ソースタイン・ヴェブレンにおけるアメリカ資本主義」(中山伊知郎博士還暦記念論文集「昭和三十三年」参照)。

(2) T. Veblen, *The Theory of Business Enterprise*, 1904, p. 1.

(3) T. Veblen, *ibid.*, p. 51.

(4) この点のいっそう詳細な論議については拙稿「ソースタイン・ヴェブレンの貸付信用論」(『金融経済』第五二号 一九五八年一〇月)参照。

(5) T. Veblen, *ibid.*, p. 289.

五 スタンフォードとミズウリ大学

そのころ、国会図書館の古文書部長の席があき、ヴェブレンはそれを望んだが、うまくゆかなかつた。一九〇六年四月には、ハーヴァード大学で連続講演をする機会があつたが、同大学への就職は実現しなかつた。その年の秋に、スタンフォード大学のジョーダン学長がやつとヴェブレンを迎えにきた。かれは年俸三、〇〇〇ドルの準教授として、スタンフォードに赴任した。しかし、ス

タンフォードでも、ヴェブレンの生活はたいしてよくな
らなかつた。講義の聴講者もけつして多くなかつた。大
学での地位も、準教授以上には上ることができなかつ
た。家庭的にも、そのころからエレン夫人とのあいだに
不和がおこり、ヴェブレンは夫人と別居して学僕をつか
って生活するようになった。

しかし、それにもかかわらずヴェブレンは、片時も研
究と執筆を怠ることがなかつた。そのころ、かれは、そ
の後、『近代文明における科学の地位』（一九一九年）に収
録された多くの経済学上の論文をかいた。「カール・マ
ルクスおよびその追隨者の社会主義経済学」（一九〇七
年）、「クラーク教授の経済学」（一九〇六年）、「近代科学
における科学の地位」（同年）、「フィッシャーの資本と
所得」（一九〇七年）、「資本の性質について」（一九〇八
年）、「限界利用の限界」（一九〇九年）などがそれである。
かれは、それらの論文によって、古典経済学、限界利
用理論と、歴史学派、マルクス主義経済学との両方をす
るどく批判し、独特の歴史観と、社会心理学とに立脚す
る「進化論的科學」としての経済学を提唱した。そのば
あい、古典学派にたいするかれの批判の論点は、そのよ

うな経済学は、「自然的」「正常的」「支配原理」「攪乱要
因」といったような多分にアニミズム的な要素をふくむ
規範的概念と、快樂と苦痛の比較計量という受動的心理
学とを基礎とし、しばしば「臆測的歴史」（ジェイズ・ス
チュアート）をもちいて、「儀典的妥当性」（ceremonial
adequacy）の法則をもとめようとする「経済的分類学」
（economic taxonomy）にすぎない、という点にあった。
また、マルクス主義経済学にたいする批判と、いわゆる
「進化論的經濟学」の方法についてのヴェブレンの見解
は、たとえば、かれのつぎのような言葉によって、その
大よその輪郭を知ることができる。

「進化論的な立場は、まったく非人間的であるが、
新ヘーゲル主義的、浪漫主義的なマルクス主義の立場
は、まったく人間的である。……浪漫主義（マルクス
主義）の論理の系列は、本質的に知性の系列であり、
したがってそれは、目的論的性格のものである。その
論理の帰趨は、おしまいまで論じつくすことができ
る。つまり、それは、ある目的に指向している。これ
に反して、ダーウィン主義の考え方においては、諸事
実のなかにみいだされ、それに帰せられる連続性は、

因果の連続性である……その系列は、無感覚な因果関係の背後の力 (vis a tergo) そのものによって支配せられ、したがってそれは本来、機械的なものである。新ヘーゲル主義、マルクス主義の発展の体系は、たがいに関争する野心的な人間精神の形象によってつくり出される。ダーウィン主義の進化の体系は、機械過程の性格をもつ。⁽¹⁾

スタンフォードのヴェブレンの生活は、きわめて多産的であったが、しかし、かれは、そこにも永くとどまることをゆるされなかった。というのは、かれがスタンフォードにきてから三年目の一九〇九年になると、再びちよつとした私行上の出来事がもち上り、そのためにかれは結局、大学を辞さねばならなかったからである。

ヴェブレンは再び就職運動に狂奔した後、一九一〇年になって、かつての教え子であるダヴェンポート H. J. Davenport 教授の尽力によって、ミズウリ大学に職をえた。かれは、その年の暮に、コロンビアに赴任し、ダヴェンポートの家の地下室を借りて住むこととなった。

ミズウリ大学でのヴェブレンは、やはり勤勉な研究者であり、精力的な著述家であった。かれは、スタンフォ

ード時代からもち越した『製作本能論』(T. Veblen, *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts*, 1914) を一九一四年になって完成した。これは、人間の経済活動の基礎となるものは、製作本能 (instinct of workmanship)、親性本能 (parental bent) および好奇本能 (bent for idle curiosity) であると考へ、それらの本能にもとづく人間の経済生活が、未開時代、野蛮時代、機械制工業時代などの各時代を通じて、どのように変化し、どのような形をとってあらわれたかを、かれ一流の緻密な論理と警拔な表現とをもって説明しようとしたものであって、かれの多くの著作のなかで、いちばん体系的で、まとまった書物である。ヴェブレン自身も、この書物については「これだけが唯一の重要な書物だ。」⁽²⁾ といっている。

一九一四年には、ヨーロッパに第一次世界大戦がはじまったが、ヴェブレンはこの年に、父祖の国ノールウェーを訪ね、そして帰米後、わずか数ヶ月のあいだに、『ドイツ帝国と産業革命』(T. Veblen, *Imperial Germany and the Industrial Revolution*, 1915) をあらわした。この書物は、他のばあいと同じように、平和的、掠奪的、隔世復

帰といったような文化人類学的な諸概念をもとにして、ドイツの経済、政治、文化形態などの特質を、イギリスのそれと比較しながら究明しようとしたものであった。そして、かれがえた結論は、ドイツはイギリスから、そのすぐれた近代的産業技術を借用したけれども、しかし、その産業能率を低下せしめるように作用した制度的厄介もの——民主主義体制——はうけつがなかった、かれらは、新しい技術を、ただちにかれらのふるいゲルマン主義にもとづく王朝国家に接穂した。そこに、ドイツの卓越した経済的軍事的な力の秘密があった。そして、そのような結合のなから、ドイツの新らしい王朝的帝国主義と、世界制覇の野望があらわれた、ということであった。この書物も、学識の豊かさや、洞察の鋭さなどの点で、たしかに名著といふべきものであった。⁽²⁾

一九一六年には、ヴェブレンは、『アメリカの高等学術』(T. Veblen, *The Higher Learning in America; A Memorandum on the Conduct of University by Business Men*, 1918)をかいた。この書物は、ヴェブレンが、シカゴ、スタンフォード、ミズウリなどの諸大学における体験をもとにして、大学の管理機関、学長、教授、教授夫人、

昇進制度、大学基金、学生獲得競争など、大学と高等学術にかんする諸問題を、するどく分析し、批判したものであった。なかでも、ヴェブレンは、最近におけるアメリカの大学が、ひとつの営利的企業としての性格をもつようになり、大学の学長が「学識の将帥」であると同時に「産業の将帥」としての性質をそなえるようになった。いきさつについて、きわめて鋭い分析をおこなった。この書物は、一九一六年三月に脱稿したけれども、それが実際には出版されたのは、ヴェブレンがミズウリを去った以後(一九一八年)のことであった。

さらに、一九一七年の二月には、『平和の性質』(T. Veblen, *An Inquiry into the Nature of Peace and the Terms of Its Perpetuation*, 1917)が出版された。この書物は、世界大戦へのアメリカの参戦に反対する意図をもって、愛国心の社会的性質を究明することを目的としたのであった。かれの見解によると、愛国的忠誠心は金銭的見栄と並行し、帝国主義的野心は営利企業と共存するものであって、この二組の要因のあいだには、緊密な相互関係があると考えられた。したがって、価格体制と私有財産制度が除去されるのでなければ、永久的平和はあ

りえない、というのがヴェブレンの結論であった。

このように、ミズウリ大学におけるヴェブレンの学問活動は、きわめて活潑であったけれども、個人的には、かれはけっして幸福ではなかった。エレン夫人との不和は、一九一一年のはじめころから、ますます決定的となり、その年の終りころには、正式の離婚が成立した。ヴェブレンはその後、一九一四年に、アンヌ・ブラッドリー (Anne F. Bradley) という婦人と再婚した。大学のなかでの地位も、なかなかよくならなかった。同僚との関係も円満でなく、学生のあいだの人望も厚くなかった。俸給は、スタンフォードでは、年三、〇〇〇ドルであったが、ミズウリでは、一九一八年になっても、やっと二、四〇〇ドルであった。大学はいっこうに、ヴェブレンの価値をみとめないようにみえた。そして、かれは、一九一七年の秋、ヴェブレンの唯一の庇護者であったダヴェンポートがコーネル大学に転じたのを機として、ミズウリ大学を辞した。

(1) T. Veblen, *The Place of Science in Modern Civilization*, 1919, pp. 436—437.

(2) マックス・ラーナーなどは、この書物をもって『有閑

階級の理論』および『製作本能論』とともに、ヴェブレンの三部作とよんでいる。(Max Lerner, ed., *The Portable Veblen*, 1950, p. 12.)

六 流転と放浪

その後、ヴェブレンは、ワシントンへ行って、連邦政府の調査事業の一部を担当したり、ニューヨークで発行されていた雑誌「ダイヤル」の主筆となったり、また、同じくニューヨークの「新社会科学学院」という夜間大学の教壇に立ったりしたが、どこへいっても永続しなかった。もはや、ヴェブレンのために安定した椅子を提供しようという大学はひとつもなかった。第二の妻アンヌ夫人は、一九一八年ころから精神病を病み、一九二〇年に死んだ。

しかし、そのあいだにもヴェブレンは「ダイヤル」その他の多くの論説や評論をかき、さらにそれらを集めて、一九一九年には『特権階級と庶民』(*The Vested Interests and the Common Man*, 1919) を、一九二一年には『技術者と価格体制』(*The Engineers and Price System*, 1921) を出版した。前の書物は、自然権、技術、営利企

業、企業者、ナシヨナリズムなどの諸問題にかんする論文をあつめたものであって、いわば『営利企業の理論』（一九〇四年）の補足のようなものであったが、後のものは、ヴェブレンの急進的な立場をもっともはっきりと表明した注目すべき著作であった。かれは、この書物のなかで、アメリカの農民や労働者のあいだには、社会変革的な潜在力はなんら存在しておらず、ただ技術者の「ソヴィエト」（団結）と総罷業だけが、社会変革の唯一の道であることを主張して、後のいわゆるテクノクラシー運動の先駆となった。

一九二三年には、ヴェブレンの最後の著作である『不在所有者制』（*Absentee Ownership and Business Enterprise in Recent Times; the Case of America, 1923.*）が出版された。この書物は、信用構造、株式会社金融と株式会社革命、アメリカの資源の組織者としての「物理と化学の技術」、不在所有者制など、アメリカ資本主義の基本問題を分析したもので、『営利企業の理論』の続篇ともいふべきものであった。しかし、社会はもはやそれにたいして、かつてのような拍手をおくろうとはしなかった。

その後のヴェブレンは、かつての教え子たちから物質

的援助をうけて、貧しく孤独な生活をおくった。一九二六年には、最初の妻エレン・ロルフが死んだ。そして、その翌年、かれは、義理の娘ベッキーにとまなわれて、スタンフォード大学時代のゆかりの地であるカリフォルニアのパロ・アルトにゆき、その山の中の鶏小屋を改造した小屋に住んで、再び東部に出ることはなかった。それは、まことに、みずぼらしい山荘で、庭は草木が繁るにまかせてあったし、家の中にはいつも野鼠がうろちょろしていた。ヴェブレンは、自分でつくった椅子を庭にもち出して、何時間でも座ったままにすごしていたといわれる。かれは、ひとを避けるようになり、ダヴェンポートがスタンフォードにきたときも、しいて会おうとはしなかった。

一九二八年の夏のころ、かれは東部へかえることを計画したようであるが、それはもはやかれの健康がゆるさなかった。かれは、その翌年の八月三日に死んだ。それは、アメリカ資本主義を真底からゆりうごかした「大恐慌」がおこった年であった。ヴェブレンの死因は心臓病であった。

その後、主として葬儀の世話をした門下生のひとり

あるレオン・アルツルーニ⁽¹⁾は、死ぬ前一週間以内にかかれたとおもわれるヴェブレンの遺書を発見した。それにはつぎのようにかかれてあった。

「死亡のばあいには、うまくできれば、いかなる種類の礼拝も儀式もやらずに、できるだけ早く、また安上りに火葬に付することが余の希望である。余の灰は、海または、海に注ぐ大河にまき散らすこと。いかなるとき、いかなる場所をとわず、また名称や性質はいかなるものでも、墓石、碑板、碑銘、肖像、扁額、碑文もしくは記念碑を、余の記念もしくは名前によって建立しないこと。余の追悼文、追憶記、肖像ないし伝記も、余に宛てた書翰ないし、余がかいた書翰も、印刷ないしは公刊せず、またいかなる方法でも、複製、複写もしくは頒布しないこと。」⁽²⁾

(1) レオン・アルツルーニ (Leon Ardztrooni) は、スタンフォード大学におけるヴェブレンの教え子で、その後、「新社会科学学院」の時代にもヴェブレンとともに住んで、その世話をし、さらにヴェブレンの死後には、遺稿集『変革期論集』(T. Veblen, *Essays in Our Changing Order*, edited by Leon Ardztrooni, 1934.) の編者となった。

(2) T. Veblen, *Essays in Our Changing Order* 1934. V. (アルツルーニによる「序文」のなか。)

(補註) なお、ヴェブレレンに關する研究については、拙稿「ソースタイン・ヴェブレレンに關する研究の展望。その問題意識を中心として」(『経済研究』第五卷第四号、一九五四年十月)、同じく「ソースタイン・ヴェブレレンの生誕百年祭」(『経済研究』第一〇卷第二号、一九五九年四月)を参照されたい。本稿でのヴェブレレンの経歴や生活に關する部分は、主として Joseph Dorfman, *Thorstein Veblen and His America*, 1934. に依つた。